【29】地下の浸水

水は低きに流れるというのは万古不易の原理であり、水関係者は常に意識しておくべき常識ですが、管路だのポンプだのと色々メカニズムが発達してくるとついつい忘れてしまうこともあります。

この 7 月の中国河南省の省都である人口 300 万人近い鄭州市（チョンチョウ）を襲った水害では、地下鉄に大規模な浸水が発生し何百人かがとり残され、何人かの死者も生じたと報じられました。

地下鉄や地下街の浸水はわが国でも、以前から小規模ではあるが時々発生しており、以前、九州博多駅前のビルの地下の浸水で一人が亡くなったり、東京でも住宅の地下浸水で亡くなった人がありました。

海外の話では過去に、ニューヨークでもチェコのプラハでも地下鉄の大規模な浸水騒ぎがありました。

地下鉄の駅の浸水は、都内に限っても低地に位置する「赤坂見附駅」はかつて浸水がくり返されるのでよく知られていましたし、近年、大深度の「麻布十番駅」、「渋谷駅」でも浸水を生じています。今のところ大事に至っていないので、メディアの関心が薄くニュースになりませんが、“澁谷”という地名の示す如く谷底の低地のその下、さらに 30ｍの地下の駅なんて考えてみればリスクの大きい話ですね。

渋谷では、再開発工事で地下に雨水貯留池が設けてありますが、以前からあった渋谷川という河川を暗渠に押し込んだ代償にしては、貯留量わずか 4000 ㎥という気休めのものであり、豪雨の時は決して地下街や地下鉄駅に逃げ込んではなりません。